城の歴史

カステルノー城の歴史は、13世紀初めに遡ります。カステルノーの有力な領主ベルナール・ド・カスナックは、熱心なカタリ派の支持者でした。1214年に、アルビジョワ十字軍を率いるシモン・ド・モンフォールがカステルノーを略奪。翌年の1215年にベルナール・ド・カスナックが城を奪い返したものの、結局ボルドー大司教の命令で城は数か月後に焼かれてしまいました。13世紀中には再建が行われ、この当時の正方形のドンジョン（主塔）と幕壁が現在まで残っています。

カステルノーは引き続きペリゴール州の有力な中心地としての地位を保持していきます。やがて、対岸に位置するベナックと敵対関係になりましたが、この二つの巨大な石造りの城砦が直接対決することはありませんでした。

1337年に百年戦争が勃発。カステルノー城は、マーニュ・ド・カステルノーとノンパール・ド・コーモンの婚姻によりコーモン家の所有となりました。コーモン家はイングランド、ベナック諸侯はフランス側を支持していました。1世紀余りの間に、カステルノー城の所有は11回も変わることになります…。シャルル7世の命による包囲戦が3週間続いた後、1442年に城は完全にフランスの手中に収まりました。

百年戦争が終局を迎えると、城を取り戻したコーモン家は再建に着手します。守備の必要性がなくなったわけではないからです。側庭は、銃眼を備えた半円形の2つの塔によって守られ、跳ね橋と新しい外堡が造られました。また、ドンジョンの隣に住棟が建てられました。カステルノーはその後も領主権力の中枢拠点であり続けました。1520年に造られた砲塔がその勢力の強さを象徴しています。

コーモン家はプロテスタント教徒になりました。カステルノー城で生まれたジョフロワ・ド・ヴィヴァン大尉は、城砦を守り、カトリック教会に激しく対立し、やがてこの地方全域で恐れられる存在となりました。その証拠に、宗教戦争の間にカステルノー城の攻略を試みる者は誰もいませんでした。こうしてコーモン家は引き続き城を所有しましたが、あまりに住み心地が悪かったため、城に住むことはほとんどなくなりました。

フランス革命が終わる頃、草木にすっかり覆われるほど放置されていたカステルノーは、間もなく採石場となります。1832年に、河川輸送の発達とカステルノー村の解放に伴い、河港に船台を建てることになったとき、新たに石材を切り出すよりも、城の南側の石をいくつか取ってくるほうが石工職人にとっては楽だったのです。こうして、石の塊は何の苦労もなく、斜面を転がりながら建築現場に無事到着しました！

カステルノー城は、新たに所有者となったフィリップ・ロシヨンとヴェロニック・ロシヨン夫妻の申請をうけて、1966年に歴史的建造物に指定されました。今日、カステルノー城は、夫妻の息子で、のを務めるクレベール・ロシヨンの所有となっています。

➔ それでは、円形の砲塔の方へ向かい、隠し戸から中へお入りください。

砲塔

隠し戸は、主要出入口の反対側に設けられた、たいてい隠れて見えない小さな扉です。包囲戦の間は、反撃を準備するための出口として使われました。

火薬を用いた銃砲が初めて開発されたのは14世紀初め頃です。当時使われた火薬の原料は、硝石と木炭と硫黄の混合物でした。
16世紀には、敵の砲兵射撃から城を守り、城側で自分たちの大砲を配置できるように、もともとあった城砦にひとつの塔が付設されました。それが砲塔です。この塔は、壁が厚さ5メートルで、死角を排除するために円形の造りになっています。

1階
射撃部屋に設置されているのは、16世紀に作られた**小型軽砲**です。

3階に通じる階段の途中には**武器庫**が設けられています。攻撃を受ける側とは反対側に位置し、万一爆発が起きても塔が危険にさらされないように工夫されています。

3階
銃眼を塞ぐ3つの火器があります。右側は**手銃**（火縄銃の原型）、残りの2つは**後装式大砲**です。

射撃が行われたこの塔の3階の丸天井のヴォールトは、中央に四角形の揚蓋が設けられており、武器弾薬や大砲の部品などを容易に上げ下げすることができました。

**15世紀には多くの技術革新がありました。大砲の多くは錬鉄棒を組立てた構造でしたが、15世紀末には青銅を用いた製造が広まりました。鋳型に流し込んで作られたため、耐久性と気密性が向上しました。
また、容易に移動できるように車輪付きの砲架に載せられました。**

砲塔（続き）

4階
こうした新しい大砲技術から生まれたのが、後装式大砲、カルヴァリン砲、多連装砲車です。
部屋の中央に見えるのは**サーペンタイン砲**です。

右手の、ニッチと呼ばれる壁の窪みには、着脱式の薬室によって装薬が容易に行える**後装式大砲**が展示されています。

陳列ケースに展示されているのは**火縄銃**です。こうして武器が軽量化されたことで、兵士は一人で持ち運びができるようになり、新しい点火システムによって他の兵士の助けが不要になりました。

窓の右側の陳列ケースに火壺に混じって展示されているのは、ドイツ製の青銅製**警砲**です。ゴシック体で、以下のような内容の碑文が刻印されています。

我が名はBülin van Efentür。
我は火薬を食べ、火を吐く。

張り出し窓の近くに見られるのは、12の銃身を備えた16世紀製の**多連装砲車**です。鉛弾を使用したこの火器は広域を覆うことができるため、戦場で威力を発揮しました。

➔ 砲塔を出ると、かつては屋根のあった住棟の階へ通じる階段があります。

テラス
この**大型の床子弩**は、飛距離が200メートルで、その矢は3人の兵士と馬一頭を貫通して扉に刺さるといわれるほど強力な武器です。

ドルドーニュ川流域とセヴ川流域を見渡す全景を目の前にすると、この土地の戦略的重要性を容易に想像することができます。

絵画展示室

11世紀と12世紀、兵士は、剣の刃や矢から身を守るために鉄の鎖かたびらを身に着けていました。

陳列ケースの中に、木製のT字型の台に掛けられた鎖かたびらがあります。その上にあるのは、頭を保護する鎖綴です。

1250年頃、から竿型武器や大槌型武器などの突撃用武器の普及と弩の改良に伴って、騎士は、「**プラット**」と呼ばれる金属製の薄い補強板を用いるようになります。

この**プラットでできた甲冑**一式が誕生するのは**14世紀末**のことです。

陳列ケースに展示されているのは16世紀初め頃の甲冑一式です。縦方向に施された特徴的な溝の装飾は、ドイツ武器製造業の発展に貢献したマクシミリアン1世（1459年-1519年）にちなんでマクシミリアン様式と呼ばれます。

装備をまとった騎士と馬の姿を描いたシーンが展示されています。プラット甲冑が兵士の全身を覆っているのに対して、さまざまな甲冑で構成される「馬鎧」によって馬の急所が覆われています。

2016年制作の壁画は、「九偉人」の作品群です。騎士を描いたこの制作プログラムは、騎士道を体現する偉大な人物とされた英雄三人を一組とした三段構成になっています。奥の正面から左に向かって、異教徒の偉人ヘクトール、アレクサンドロス大王、カエサル、ユダヤ人の偉人ヨシュア、ダビデ、ユダ・マカバイ、そして右側にキリスト教徒の偉人アーサー王、シャルルマーニュ、ゴドフロワ・ド・ブイヨンとなっています。15世紀ヨーロッパ独特のこの装飾は、理想の騎士像に自らの姿を重ね合わせた貴族たちに大変好まれました。「デトランプ」技法（天然顔料をカゼインの中に溶いてドライ石膏に塗る絵画技法）を用いて描いたもので、当時の色調が忠実に再現されています。

➔ 木造の小階段を通って、弩（おおゆみ）展示室の方へお進みください。

ドンジョンの下階室

この部屋には、戦闘用や狩猟用の強力で命中精度の高い弩の数々を集めた見事なコレクションが展示されています。

弓がさまざまな材料でできた弩は、腹帯（左側の矢狭間にある胴鎧の帯を参照）にかけたS字状の鉤を使って引きます。
弓は牛の角、木材、腱を用いて作られています。その後、鋼鉄製の弓が使用されるようになります。

これに続いて、鐙付き弩が誕生します（入口から入って右手にある陳列ケース）。これは特に騎兵隊が使用したものです。

弩はますます強力になり、滑車装置とも呼ばれる弩をぴんと張るための器具（左側の矢狭間）を使用するほどでした。大型で扱いにくく、速射性に欠けるこのメカニズムは、要塞の守備や包囲の場合に歩兵によって用いられました。

弦巻上式弩は、滑車装置を備えたタイプと比べて同等の効果を発揮するにもかかわらず高速で、場所も取りません。軍隊でこのシステム（ダブルショーケースの中）を最後に使用したのは、フランソワ1世の騎馬近衛兵でした。

小球用弩（ニッチに収められた大型のケースの中）はとても軽く、兎や野鳥などの小動物の狩猟に最適です。この弩を使って、テラコッタまたは鉛の小さな丸い球を飛ばすことができます。

形や設計がどのようなものであれ、飛び道具は中世の戦いにおいて重要な役割を果たしました。

弓から派生した弩は、弓にはない重要な2つの特徴を備えています。**強力**で飛距離が大きく伸びること、そして**命中精度が高い**ことです。スロットにより弦を保持できるため、余分な力を使わずにじっくりと照準を合わせることができたからです。

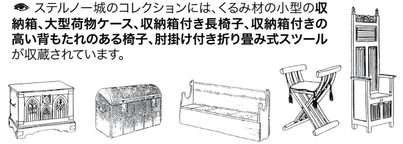
しかしながら、再装填には時間がかかる武器で、弓の射手が1分間に10本ほど矢を放つことができるのに対し、弩の射手の場合はわずか2本でした。

➔ 部屋を出て左手にある狭い階段を上り、ドンジョンの上階室にアクセスしてください。

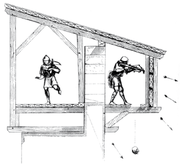
ドンジョンの上階室

この部屋には、**14世紀と15世紀の調度品のコレクション**が展示されています。
中世期、調度品の数はきわめて限られており、領主の移動があるたびに、旅先まで運ばれました。毎回、必需品としてタペストリーや織物、食器類を運んだため、これを収納するための家具もいくつか必要でした。

ステルノー城のコレクションには、くるみ材の小型の**収納箱、大型荷物ケース、収納箱付き長椅子、収納箱付きの高い背もたれのある椅子、肘掛け付き折り畳み式スツール**が収蔵されています。



カステルノー城における**指令室**の役割を果たしたこの部屋は、以下のような、防戦上の重要拠点へと通じています。



木造の**跳ね出し櫓の回廊**（見学可能）：13世紀、この櫓の床には揚蓋が設けられており、兵士たちは、敵の兵士の攻撃から城を守るために城壁の底部めがけてここから石などを投げつけることができました。その後、この木造の回廊に代わって、ドンジョンを囲むように石造りの**石落としの回廊**が設けられました。城の修復作業の際にこの跳ね出し櫓が復元されました。

巡回路：幕壁の上にあるこの巡回路から、弓と弩の射手は側庭と上の中庭を監視することができました。ここから、下の城壁、外堡、幕壁までの一連の防衛線を見張り、攻囲軍の侵攻にひそかに対処することが可能でした。

➔ 見学を続けるには、巡回路を通って住棟へお越しください。

途中で、城の守備として使われた、張力を利用した投石器の一種である弩砲の前を通ります。この見学を利用して、ドルドーニュ川流域を臨む美しい景観をお楽しみください。右手にはラ・ロック・ガジャック、左手にはベナック、そして正面にはマルケイサック城があります。マルケイサック城は、22ヘクタールの敷地に刈り込みのツゲが並ぶ空中庭園で有名で、歴史文化財に指定されています。

ご見学ありがとうございました！

よろしければ、以下もご利用ください
ライブラリー・ショップ。
年間を通じてオープン

ライブラリー・ショップでは、専門書、攻城兵器の模型、タペストリーの複製、宝石の複製、グラス、ペン、インク、カリグラフィー用の葦ペン、その他オリジナルのお土産品などを**販売**しています。

LA TAVERNE（ラ・タヴェルヌ）:
シーズン中のみオープン

La taverne では、軽食とお飲み物を提供しています。この緑豊かなあずまやは、ドルドーニュ渓谷の美しいパノラマを眺めながらの休憩にうってつけです。

カステルノー城
歴史的建造物
24250 - Castelnaud-la-Chapelle
電話：05 53 31 30 00

ウェブサイトでカステルノー城の最新ニュースをご覧ください
www.castelnaud.com
//castelnaud.omeka.net

投石機展示室

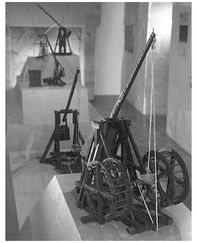
この展示室には、実物の10分の1に復元された、トレビュシェット型投矢機が展示されています。
13世紀の軍事技師であった**ヴィラール・ド・オヌクール**の設計図を元に復元されたこの武器は、梁の部分から投射物が発射されようになっています。その大きさ（高さ30メートル！）と効果が低いことを考えると、この武器は実際には一度も作られなかっただろうと想像されます。

次の展示室に進み、
10分の1の大きさに作られた**兵器の模型**をご覧ください。

ペリエール（投石機）は、引張力を利用した兵器で、人が綱を引っ張り、アームの部分を跳ね返らせて石を飛ばします。

飛ばす動力を上げるために、中世の技師たちは、**歯車型マンゴネル、トレビュシェット、クイヤール**のような、機械の力によって作動する、より強力な兵器を生み出しました。

これらの兵器はすべて木製であったため、今日まで残っているものはありません。**ヴィラール・ド・オヌクールやコンラート・カイザー**といった軍事技師の報告書、細密画、画帳、協定書を元に、これらの兵器の復元が可能となりました。



壁のくぼみの展示ケースには、古代で使われた武器である**カタパルト、塔車、破城槌**の20分の1の模型が展示されています。

階段には、コンラート・カイザーによる素描の複製が掛けられています。

武器展示室

刀剣類

短剣は歩兵がベルトに付帯するものでした。短剣は、奇襲によって人を殺すのに威力を発揮しました。弓兵もまたこれを付帯していました。弓矢での攻撃の後、短剣によって倒れている敵の息の根を止めました。
壁の陳列ケースの短剣

剣は、中世における武器の中で主要なものでした。剣の刃は、切断、貫通、受け流しができるよう作られています。中世の剣のほとんどは、刃がまっすぐで幅広く、両刃になっていました。十字型のつばと柄頭を持ち、歯止めとなっている取手の部分から手が滑らないようになっていました。
14世紀と15世紀の剣

突撃用武器
から竿、斧、ハンマー、大槌型武器は、その重さや、切刃、切っ先を用いる武器です。

長槍
多様な種類があるこの長槍は、歩兵が持つ武器で、隙間なく並んだ隊形を取る彼らは、騎兵による攻撃を恐れませんでした。様々な形をした鉄の穂は、かなり長い木製の柄の先に取り付けられています。長槍は、形によって様々な名前が付けられています。
薙刀型の槍、長柄鎌型の槍、バルディッシュ、鉾槍、鉤付き槍、短槍…

長槍の右側に展示されている**様々な農具**は、長槍の原型を想起させるものです。特定の必要性に応じてこうした武器の形に進化する前に、道具類は人間が用いた最初の武器であったはずです。

これらの道具類の右には、槍試合に用いられた武具が展示されています。「裾広がりの」甲冑は、鋼鉄の裾の部分が下半身を保護するようになっており、騎乗しない槍試合の際に身に着けたものです。「ヒキガエルの頭」と呼ばれた大きな兜は、敵の槍を打砕くか敵を落馬させた者が勝ちとなる「GESTECH」と呼ばれるドイツ式槍試合に使われたものです。最後の展示物は、多少驚くような、注目に値する品です。これは兜の頂飾りで、槍試合に出場する者が誰であるか見分けがつくように付けられたものです。.

階段を降りて、
他の展示室をご見学ください。

内部見学コース終盤

中央に陳列ケースのある展示室
最初の陳列ケースには、**剣**と**短剣**が展示されています。2つ目の陳列ケースには**突撃用武器**が展示されています。槍の穂先の他に、足や木靴を傷つけるために地面に埋めて使った**鉄びし**や、**足裏損傷用武器**などがあります。

1442年の攻囲戦の模型
1442年10月にあった攻撃を復元したものです。シャルル7世の命令を受けた**フランス軍**は、**イギリス軍の手中にあったカステルノー城を包囲しました。**3週間後、イギリス軍は、命と400エキュの保証を得て、降伏しました。

展示室を出て階段の方に向かい、
1階まで降りてスライド上映室に入ってください。

スライドショー
1階の台所の近くにある、かつて食料貯蔵室であったこの場所では、軍事的建造物の移り変わりについてのスライドショーを上映しています。

台所
格縁のついた丸天井と敷石は、この場所に残っていたものを用いて修復されました。ここには、小さなパン焼き窯を備えた大きな暖炉が設置されています。壁に備え付けられた古い戸棚には、上の中庭の井戸にあった、16世紀にさかのぼる2つの手桶が展示されています。

展示室を出て、**上の中庭**と呼ばれる場所を通っていきます。この中庭には、城での生活における重要な要素である井戸が掘られています。**井戸**は46メートルの深さで、地下水からくみ上げるようになっています。この中庭は、巡回路を上にのせた15メートルの高さの幕壁によって取り囲まれています。

外堡
主要な出入口を過ぎると、**堀**の上に木製の階段が渡され、それが**外堡**に通じています。この建造物は城の入口を守るものでした。壁にはいくつもの**銃眼**が開けられ、丸天井には入口を監視する**三角形の穴**が一つ開けられていました。これは、入口から入ってくる攻撃者の頭上に、防護者が物を落とすための穴でした。

城外

側庭は、城と村を隔てる第一城壁と、ドンジョンを保護する幕壁の間のスペースです。中世時代、ここには鍛冶場、かまど、厩舎がおかれ、時には職人（織工、陶工など）の屋台が出ることもありました。城が攻撃された時には、村人の避難場所ともなりました。

次に、稜堡の方へ移動してください。
稜堡にのぼって攻城戦に使われた実物大の兵器をご覧ください。

射石砲
扱いが大変難しい兵器です。再び装填する前に、砲が冷えるのを待たなければならないため、砲撃間隔が長く、1時間に最大で1回の砲撃が可能でした！待つ間、攻撃者は、車輪のついた大きな盾である**木製の遮蔽物**の陰に入って待機しました。敵を監視したり、弩（おおゆみ）を使ったりするために、遮蔽物には三角形の穴が開けられていました。

ペリエール（投石機）
弩砲と同様に、ペリエールは、「人力による引張力」を使った兵器です。威力では劣りますが、古さでは他に勝っています。これは防衛のための兵器と見なされており、騎兵による攻撃には大変効果がありました！復元モデルによる実験では、1kgの砲弾が時速140kmの速さで標的に当たることが確認されています。

マンゴネル（投石機）
12世紀末に登場したこの兵器は、固定式の数トンのおもりを用います。後にトレビュシェットに用いられるようになった連節式のおもりの利点を技師たちはまだ知りませんでした。そのため、支柱を下におろすために、多大の労力を要しました！

トレビュシェット（平衡錘投石機）
おもりを使った武器に属するこの兵器は、16世紀まで使われました。1時間に2、3回と、投石間隔が長かったにもかかわらず、中世で最も強力な兵器でした！抑止効果が抜群に高く、ただその姿を見せるだけで、数々の場所を降伏させました！
展示してある石の砲弾は、復元したものです。砲弾には鉄の輪をはめたものもあり、それらは重さが100キロを超えました。

下に降りると、**中世の庭**がご覧いただけます。この庭は、囲いをした、幾何学模様の庭となっています。何よりもまず実用性が優先されており、栽培されている植物は、ほとんどが薬、染料、料理に使われました。